

担い手からみる祭りの創出と維持

——関門よさこい大会の事例から——

李 良 姫

I はじめに

1954年に高知で始まった「よさこい祭り」は、現在では、日本全国で開催されるようになった。よさこい祭りの発祥地である「高知よさこい祭り」をはじめとして、日本国内はもちろん、海外で開催されているよさこい祭りまで多数の論文を発表している内田は、「私の推測では2000年代には800ヶ所以上で、鳴子踊りとの競演イベントが開催される。また、一説には、よさこいを踊る人数は、約200万人に上る」としている¹⁾。日本の国中どこでも「よさこい」といえるほど小規模から大規模まで様々なよさこいが開催されている。その代表的な祭りが札幌で開催されている「YOSAKOI ソーラン祭り」である。YOSAKOI ソーラン祭りは大学生が中心になり、祭りを創出・維持しており、現在では、「さっぽろ雪まつり」に次ぐ、北海道の代表的な祭りとなっている。

本研究と関連する先行研究は、祭りの創出・維持全般に関するものと、高知のよさこい祭りを含め日本全国、さらには海外で開催されているよさこいに焦点を当てたものに分類できる。祭りの創出・維持に関する研究には、煎本（2001）のまりも祭りの創造と変化の過程、それをめぐる語り、阿寒アイヌコタンと観光経済の関係、アイヌの帰属性と民族的共生の過程を明らかにした研究がある。また、中野他2人（2013）は、博多祇園山笠に関わりの深い子どもの方が、地域住民や近所の子どもたちとのコミュニケーション能力が高く、土地に対する愛着が強いと主張している。さらに、佐々木他3人（2010）は、担い手の不足が課題になっている奥能登の「キリコ祭り」の地域ごとの衰退の要因と過程の特性を示している研究も出している。筆者も、韓国で開催されている祭りの事例を中心に、祭りの創出・観光資源化の成功要因と課題について研究発表している²⁾。

よさこいに関する先行研究は、内田（2008）（2013）により、高知よさこい祭りを始め、国内外で開催されているよさこい祭りに関連する論文が数多く発表されている。内田の論文は、本研究に示唆するものが多い。特に、海外への展開事例から、現代文化、地域文化を再考している研究は意義があると思われる。

筆者は、札幌 YOSAKOI ソーラン祭りを始め、日本全国で開催されているよさこいを多く参与観察してきた。このような知見を踏まえた上で、2014年8月25日に開催された、「第8回関門よさこい大会」において参与観察調査に加え、踊り参加者にアンケート調査及びインタビュー調査を行った。また、事前に開催された関門よさこい大会実行委員会の会議にも参加した。さらに、関門よさこい大会開催期間の前後に亘り、実行委員会濱崎康一代表及び参加者にインタビュー調査を行った。

本論文では、よさこい参与観察に加え、アンケート及びインタビュー調査を分析した上で、祭りの創出の過程と維持方法について明らかにした上で、課題を提示する。祭りが創出され運

営、維持されていく過程を祭りの担い手を中心に考察することから、祭りの担い手の不足が課題となっている現代社会の中で祭りを維持していくための解決方法を見出すことを研究の目的とする。

II 全国よさこい関連祭り現況

1. よさこい関連祭り概要

内田は、「よさこい祭りは元々、1954年に高知市で地域活性化のため始められた踊りのイベントである。よさこいとは、踊りのジャンルとそれによるイベント（よさこい祭り）を指す」としている³⁾。以下の第1表は、2014年に開催されたよさこい関連祭りの一覧である。もちろん、この表に記載されていないよさこい関連祭りもまだまだ多くあると思われる。第1表に表れているように、よさこい祭りの名称は、地名の後に「よさこい祭り」が付く場合が多く、次に、地名の後に「よさこい」のみが付く場合がある。また、祭りの中身はよさこい関連祭りであっても、名称のみでは、よさこい関連祭りとはわからない祭りもある。

よさこい開催の目的は地域活性化や観光客集客であった。また、神戸のような震災の復興を目指した例もある。よさこいの人気と評判に目をつけ、従来の祭りの名によさこいを追加したり、よさこいの踊りを取り入れたりしている例が多く見られる。従来の祭りのみでは集客力が落ちることや、祭りに新しいことを取り入れようという試みから、1990年代から2000年を前後に全国的によさこい関連祭りが開催されるようになった。開催曜日は集客しやすい土日が多く、金曜日から3日間開催されることもある。

第1表 2014年よさこい開催一覧

月	日程・曜日	名称	地域
3	23 (日)	第11回よさこいかぬまフェスティバル	鹿沼市
4	5 (土)～6 (日)	第10回京都さくらよさこい	京都市
	6 (日)	第15回川棚温泉まつり舞龍祭	下関市
5	3 (土)～5 (月)	第8回よさこい夢まつり	名古屋市
	12 (土)～13 (日)	第6回黒崎よさこい祭り	北九州市
6	1 (日)	第11回湘南よさこい祭り	平塚市
	4 (水)～8 (日)	第23回 YOSAKOI ソーラン祭り	札幌市
	13 (金)～15 (日)	第18回能登よさこい祭り	七尾市
7	27 (日)	第11回おどるんや紀州よさこい祭り	和歌山市
8	2 (土)～3 (日)	第11回おどるんや紀州よさこい祭り	和歌山市
	9 (土)～12 (火)	第61回よさこい祭り	高知市
	22 (金)	第14回坂戸よさこい	坂戸市
	23 (土)	第8回関門よさこい大会	下関市
	23 (土)～24 (日)	第14回原宿表参道元氣祭・スーパーよさこい	渋谷区
	23 (土)～24 (日)	第14回坂戸よさこい	坂戸市
	29 (金)～31 (日)	第16回につぼんど真ん中祭り	名古屋市
	30 (土)～31 (日)	第9回よさこい in 府中	府中市
31 (日)	第12回調布よさこい	調布市	

9	13 (土)	第10回深川よさこい祭り	江東区
	13 (土)	第三回結人祭 学生と地域の人々を繋ぐお祭り	山口市
	14 (日)	第12回相模原よさこい RANMU!	相模原市
	14 (日)~15 (月)	第14回うつくしま YOSAKOI まつり	郡山市
	19 (金)~21 (日)	第15回神戸よさこいまつり	神戸市
	20 (土)~21 (日)	第16回 ODAWARA えっさホイおどり	小田原市
	21 (日)	第15回 神戸垂水よさこいまつり	神戸市
	27 (土)	第16回ござれ GO-SHU!	甲賀市
	27 (土)~28 (日)	第7回 KOBE ALIVE~神戸新舞~	神戸市
	28 (日)	第14回とわだ YOSAKOI 夢まつり	青森市
10	11 (土)~12 (日)	第17回みちのく YOSAKOI まつり	仙台市
	11 (土)~12 (日)	第15回東京よさこい	豊島区
	11 (土)~12 (日)	第14回 YOSAKOI かすや祭り	粕屋町
	11 (土)~12 (日)	第17回安濃津よさこい	津市
	13 (月祝)	第15回大阪メチャハッピー祭 本祭	大阪市
	18 (土)~19 (日)	第11回ゑえじゃないか祭り	泉州市
	19 (日)	第5回渋谷よさこい	大和市
	19 (日)	第9回つるせよさこい祭り	富士見市
	24 (金)~26 (日)	第17回 YOSAKOI させば祭り	佐世保市
	25 (土)~26 (日)	第9回ちば YOSAKOI	千葉市
11	1 (土)~2 (日)	第13回ドリーム夜さ来い祭り	江東区
	8 (土)~9 (日)	第18回よさこい東海道	沼津市
	8 (土)~9 (日)	第6回龍馬よさこい	京都市

出所：ザ・よさこい祭り実行委員会、よさこい WIKI プロジェクトよさこいカレンダー HP
に加え、筆者が知り得た情報を追加し、作成⁴⁾。

2. よさこいの魅力

(1) 踊り参加者

よさこい関連祭りに参加する踊り子へのインタビュー調査の結果、よさこいの魅力を以下のようにまとめることができた。まず、踊ることから得られる喜びである。札幌 YOSAKOI ソーラン祭り創出の主役であった長谷川氏と第1回開催当時の北海道大学の教員であった坪井氏の共著である『YOSAKOI ソーラン祭り 街づくり NPO の経営学』は、その誕生背景や、その後の成長経緯を紹介している。坪井氏は「大観衆の前で、自分たちの練習の成果を披露できる。祭りのときは、踊り子一人ひとりが主役だ。その主役であるという快感が何とも言えないのだ⁵⁾」とし、踊ることの楽しさについて述べている。踊り子にとっては、祭りを単に見るのみではなく、ステージに立って、大音響の中で、観衆の注目と拍手を浴びながら、踊れることは大変嬉しいだろう。踊り子は一度踊ると「やみつき」になるとよく言う。

また、表現の場や機会が少ない現代社会において、思い切り踊れる場、すなわち自己表現の場がよさこい関連祭りには提供されている。祭りは非日常の場である。祭りで踊ることによって、非日常の場で自己表現できる喜びを満喫できるというところに魅力がある。

加えて、個人ではなくチームとして参加することで仲間意識を向上させることができる。日常的な職場や家族関係ではなく、踊りを通した一体感や共同体意識が芽生えてくることで、仲間意識が高まることもよさこいが持つひとつの魅力になっている。

さらに、参加チームの演舞後の審査により、優秀チームを決めるというシステムが達成感の向上に繋がっている。仲間とひとつの曲を作り上げていく過程や、表現してひとつになれた達成感を得ることができる。ほとんどのよさこい関連祭りは、審査され優勝チームは表彰される。みんなで賞をとれた時の喜びなどが祭り参加のモチベーションを上げる材料になっている。

(2) 主催側

イベントの開催は集客に有効であり、地域活性化に繋がるため、多くの地域イベントが開催されている。よさこい関連祭りを新しく開催してきた人々の思いは、よさこいを広めたいことが目的ではない。彼らは、地域を活性化させる手段が必要であった。それがよさこいだった。例えば、1チーム6分でステージを組むので、1時間で10チームの演舞が行われる。チームのカラーもいろいろ違って、曲や衣装が変わることで、あきないステージが組める。地域のイベントで1時間も持つコンテンツは他にはなかなかないと思われる。3時間、4時間といったステージイベントが容易に組めることが主催側にとっては魅力となっている。

3. 学生の役割

現在、地域イベントにおける大学生の役割は大変重要になっており、もはや大学生の力を借りずには祭りの運営が困難な祭りも多くなっている。大学生がよさこい関連祭りに関わる類型としては、単独の新しいよさこい祭りを創出する場合と、既存の祭り開催の一部として、あるいは、既存の祭りを変更させた場合とに分けることができる。北海道内の大学生が中心になり祭りを創出・維持している、札幌 YOSAKOI ソーラン祭りが前者として代表的である。また、山口県内の大学生が、大学生と地域との交流を目的として開催、企画、運営している「結人祭」も単独の新しいよさこい祭りを創出した事例に該当する。

一方、「京都さくらよさこい」のように、商店街の活性化や、地域と学生の交流が目的で、すでに開催されている祭りに追加してよさこいスタイルの祭りを開催する例が後者である。京都さくらよさこいは、京都市内の大学生が集まり、鴨川の河川敷で毎年開催されている「鴨川さくらまつり」の企画の一環として、開催されたものである。

よさこい関連祭り以外の地域イベントでも大学やクラブなどが組織的に参加する場合もあるが、一般的に、地域イベントに大学生が参加する場合は、スタッフやボランティアとして個人的に参加するケースが多い。一方、新しいよさこい祭りの開催や既存の祭りの一環として参加する場合は、組織的にチームとして祭りに関わるケースが多い。チームとして、あるいは個人としてのいずれの場合も大学生の祭りへの開催及び参加は、地域や世代間の交流を通じたコミュニケーション能力の向上や若者の旅行促進につながるため積極的な参加が望ましい。

Ⅲ 祭りの創出と維持

1. 関門よさこい大会誕生経緯

下関市では、「馬関まつり」、「しものせき海峡まつり」、「関門海峡花火大会」が3大まつりとされている。この下関市3大まつりのひとつである馬関まつりは、1978年に第1回が開催され、毎年8月に開催されている。また、2000年からは馬関まつりの主催団体である「下関青年会議所」が、札幌 YOSAKOI ソーランまつりの成功事例や佐世保におけるよさこいの取

第2表 関門よさこい大会開催経緯

年	名称	地域
2000	馬関よさこいカーニバル	下関市
2001	よさこいにつぼん 山口まつり維新	きらら博
2002	山口きらら博 メモリアルイベント よさこい山口県大会	きららドーム
2003	『よい・世さ・こい・周南!』中国・九州 YOSAKOI 山口県大会	周南市
2004	よさこい山口県大会 兼 第三回長州とことん総踊り in 萩	萩市
2005	山口七夕ちょうちんまつり よさこい山口県大会	山口市
2006	よさこい山口県大会	岩国市
2007	第1回関門よさこい大会	下関、門司

出所：インタビュー及び「馬関奇兵隊@総督のブログ」を参考に筆者作成⁶⁾。

り組みに影響を受けて、「馬関よさこいカーニバル」として馬関まつりによさこいを導入した。馬関よさこいカーニバルは、馬関まつりによさこいによる盛り上がり刺激を取り入れようとして開催されたのである。

また、2001年の「きらら博」での「よさこいにつぼん 山口まつり維新」の成功を契機に、山口県内でよさこいチームが急増した。さらに、2002年からは、「よさこい山口県大会」が山口県内各地の持ち回りで開催され始め、2007年には馬関まつりが「よさこい山口県大会」の当番開催地になった。その時下関市の対岸に位置する門司港からの「下関市と門司港が連携して山口県大会を開催したい」という要請を受けて、「関門よさこい大会」が誕生したのである。

2000年に開催された、「馬関よさこいカーニバル」が、既存の祭りによさこい踊りを取り入れて、祭りと地域に活力を与える狙いから誕生したのに対し、「関門よさこい大会」は、豊富な観光素材を持つ、下関市と門司港レトロをよさこい関連イベントでつなぐことが目的で始まった。また、こうしたことで、両地域が持つ観光魅力を向上させ、さらに、地域間連携のツールとしてのイベント開催の可能性を広げたといえる。

2. 運営・維持

祭りスタッフは開催期間中スタッフとして裏方に徹して、最後に「感謝の舞」と称して1回踊ったり、参加団体の少ない前夜祭に出て踊ったりするのが一般的である。このように、スタッフと踊り子をきりわけて運営するのが一般的である中で、関門よさこい大会では下関のチームは、全員スタッフではあるけれども、他の参加チーム同様、規定の3回の演舞を踊れるように、役割分担やタイムスケジュールを調整している。なぜなら、彼らにとっても親や友達の前で踊れるハレの舞台の場である。裏方として踊りの場を提供すると同時に提供される側にもなるのである。

前述したように、地域イベントにおける大学生の役割は大きい。関門よさこい大会では、他の地域イベントよりもさらに大学生の役割は大きい。下関には、約50名で結成された「下関市立大学 震」と約30名の「梅光学院大学 LUCIS」という2つの学生よさこいチームがある。各チームからは代表3人ずつくらいが関門よさこい大会実行委員会に参加し、事前会議やテント、看板、椅子の出し入れなどの当日の会場設営及び撤収を行っている。また、両校の4年生6名程度が専属スタッフとして県外チームをアテンドする。このように、総勢80名がスタッフともなるのである。朝の設営が終わったら、門司と下関の計3会場で、通常通り

よさこいを演舞する。開催地に属する下関や門司を拠点とするチーム以外の他地域から参加するチームも基本的に同様の役割を担っている。彼らは、事前会議など企画から設営、撤収まで、祭りの運営のスタッフであり、同時に踊る踊り子でもある二つの役割を果たしている。

3. 国際交流

日韓交流の象徴的な歴史である「朝鮮通信使」を記念文化交流事業として韓国釜山で開催されている「朝鮮通信使祭り」には、日本における長崎、対馬、福岡、黒崎、下関、広島など朝鮮通信使縁の地の各都市を代表する芸能団体が参加しているが、最近これらの都市から、よさこいが参加することが多くなっている。朝鮮通信使の上陸地である下関市では、市の代表的な伝統芸能である「平家太鼓」や「下関少年少女合唱隊」、「上臈道中」が順番で参加をしている。

しかし、2004年以降は、関門よさこい大会のホストチームであり、下関に活動の本拠地をおいている「よさこい馬関奇兵隊」が一番多く参加している。これには、衣装や演目内容が毎年同じ太鼓などに比べて、曲を変えたり衣装が変わったりすることが理由のひとつであろう。また、観衆にも、太鼓や合唱などの伝統芸能よりも、軽快な音楽が流れ、華麗に踊るよさこいの方が好まれるからである。特に、韓国の観客からも、踊り子が笑顔で元気に踊る姿に感動し、盛り上がるとの高い評価を得ている。衣装や曲、踊りに「日本らしさ」が感じられる。太鼓や三味線など日本的な楽器のメロディーに加え、踊りの中にも日本らしい振付が感じられる。そのように現代的でありながら、日本の伝統をも取り入れていることから、ヒップホップやジャズダンスではなく、よさこいが、日本あるいは都市の代表として外国に派遣され、それなりの評価を得ているのであろう。

関門よさこい大会には韓国からも大学生が自費で毎年参加している。2013年は17人が参加し、2014年度には在学している大学での事故や旅客船の事故があったにもかかわらず7名の大学生が参加した。参加した韓国からの学生は「2011年に当時、新入生の中では1人だけ先輩達と一緒に参加したが、情熱的に踊る人々と、その踊りに惜しまない拍手を送ってくれる観客の姿を見て日本の祭りの素晴らしさに感動した。勇気を出して日本の祭りに参加して良かったと思っている。今年も様々な困難を乗り越えて参加することができて嬉しい。踊りとホームステイを受け入れてくれた皆さんに感謝し、この縁を今後も大切にしていきたい」としている。

このようなよさこいの魅力を生かし、世界に飛び立ったよさこい踊りを通して国際交流ができていく。国家間の関係が悪化しても民間レベルでの持続的な交流が必要であると盛んに言われているが、民間レベルでの交流も安易なものではない中で、踊りを通して交流ができることは大変有意義であろう。特に、日韓のように度々政府間で問題が生じ、今なお、関係がぎくしゃくしている中では、このような持続的な交流が必要になっている。

IV 参加者アンケート

1. アンケート概要

アンケート調査は、2014年8月23日、下関と門司で開催された、「第8回関門よさこい大会」において各チームの踊り子数人を対象に行った。臨場感を得るため、踊りが終わった直後

にアンケート用紙を配布した。激しい踊りの後の調査にもかかわらず、快く協力していただいた。合計回答者は、176名で、その内訳は男性が28名、女性が91名で、アンケートの最後の属性を聞く質問を見落とした回答者が57名あったが、分析には問題はないと判断した。

回答者の居住地は、下関市が最も多く48名で、山口県内が29名、福岡県が27名、その他、広島県や長崎県、兵庫県からの参加者もいた。職業別では、学生が最も多く、会社員、主婦の順になっている。年代別では、学生が多いことから10代が最も多く、40代までの割合が高く参加者の年齢層が低いことがわかる。

第3表 回答者属性

区分	項目	人数	%	区分	項目	人数	%
性別	男性	28	76	年代	10代	41	34
	女性	91	24		20代	32	27
職業	学生	52	48		30代	20	17
	会社員	44	40		40代	13	11
	主婦	13	12		50代	9	8
					60代以上	4	3

2. 参加動機

参加動機に関する質問では、複数選択可にした。表3で示した単独回答は、回答を一つのみ選んだ回答である。合計68名が一つのみを選んでいる。この単独回答では、「大好きな祭りだから」が最も多い27名、「よさこい踊りが好きだから」が20名、「毎年参加しているから」が9名、「地元のイベントだから」が5名、「チームの方針で」が4名で、「仲間と一緒に時間を過ごしたいから」が3名であった。その他、「学生の時からお世話になっている祭りだから」、「元気になりたい」、「初めての参加だから」などの答えがあった。

複数回答の集計の結果、「よさこい踊りが好きだから」が112名で、「大好きな祭りだから」が75名となっている。「チームの方針」が20名、「毎年参加しているから」が54名、「地元のイベントだから」が41名で、「仲間と一緒に時間を過ごしたいから」が48名、「故郷の祭りのPRも含めて」が18名となっている。

第4表 参加動機

項目	単独回答	%	複数回答	%
大好きな祭りだから	27	40	75	20
よさこい踊りが好きだから	20	29	112	31
毎年参加しているから	9	13	54	15
地元のイベントだから	5	7	41	11
チームの方針で	4	6	20	5
仲間と一緒に時間を過ごしたいから	3	5	48	13
故郷の祭りのPRも含めて	0	0	18	5

3. 参加回数

関門よさこい参加回数を聞く質問には、「初めて」が63名で最も多く、「毎年」が40名で、「2回目」が22名、「3回目」が12名、「4回目」が17名、「5回目」が10名、「6回目」が8

名、「7回目」が4名となっている。

また、「大きささまざまな催しを含む祭りやイベントに、年間何回程度、よさこいで参加するか」の質問では、「5～10回」が最も多い47名、次いで「30回以上」が34名、「16～20回」が23名、「11～15回」と「21～25回」が各々20名、「5回以内」と「26～30回」が各々13名となっている。

山笠や、ランタンフェスティバル、祇園まつりや、ねぶたまつりなど、踊り子としてではなく見る側として「年間何度くらい「祭り」を見学するのか」の質問には、「3回」が39名、「1回」が37名、「2回」が36名、「5回」が19名、「4回」が12名、「8回以上」が12名、「6回」が4名、「7回」が2名となっている。

4. 楽しいこと・辛いこと・再参加意向

関門よさこい大会に参加して「楽しいこと」に対する質問には、回答を1つのみ選択した答えでは、「踊ること自体が楽しい」が31名、「大会の雰囲気」が5名、「会場が素敵」が4名、「グルメも含めた関門エリアが楽しい」が1名、「船にのれること」が3名、「他のチームの友達と会える」ことが1名となっている。

また、複数回答を集計した結果、「踊ること自体が楽しい」が最も多い150名で、ほとんどの回答者が踊ることが楽しいと答えた。次いで、「大会の雰囲気」が97名、「会場が素敵」が65名、「グルメも含めた関門エリアが楽しい」が53名、「船にのれること」が16名、「他のチームの友達と会えること」が60名、「お客さんが多い」が22名、「大会後の打ち上げ」を3名が選んだ。

第5表 関門よさこい大会に参加して楽しいこと

項目	単独回答	%	複数回答	%
踊ること自体が楽しい	31	71	150	32
大会の雰囲気	5	11	97	21
会場が素敵	4	9	65	14
船にのれること	3	7	16	3
他のチームの友達と会えること	1	2	60	13
グルメも含めた関門エリアが楽しい	0	0	53	11
お客さんが多い	0	0	22	5
大会後の打ち上げ	0	0	3	1

一方、「関門よさこい大会に参加して大変なこと」では、下関や福岡県以外からの参加者から「距離が遠い」が36名で最も多く、「他のイベントとの日程調整」が18名、「お金がかかる」が11名、「祭りのタイムスケジュールがきつい」が13名となっている。

再参加意向に対しては、「必ず参加する」が138名で、「参加する」が22名で「状況による」が7名となっている。ほとんどの回答者が再参加する意向であった。

V 今後の課題

関門よさこい大会における、参与観察、アンケート及びインタビュー調査の結果、よさこい

踊りの魅力や実行委員会をはじめとする、担い手の関門よさこい大会に対する情熱により新しい祭りが創出され、維持されていることがわかった。一方、関門よさこい大会を継続していくための課題として以下のことが挙げられる。

1. 集客の拡大

筆者は、2014年8月23日午前10時から始まる門司港で開催される第8回関門よさこい大会を参与観察し、観客の少なさに驚いた。下関では、当日に馬関まつりが同時に開催されていることから一定の観客は保っている。一方、門司港側では集客の拡大が課題になっている。前述の踊り子を対象に行ったアンケートでは、「関門よさこい大会に地域外から観光客が見学することについてどう思うのか」に対する質問に、ほとんどの人が「嬉しい」、「誇りに思う」、「大歓迎」と答えた。観客が多いほど踊り子もより楽しく踊れる。門司港のみならず、100万都市である北九州市全域と連携したプロモーションで集客を拡大させていくことで、より魅力ある祭りにしていくことができる。

2. 予算の確保

関門よさこい大会は、わずかな協賛金以外は、踊り子の参加費で運営している。もちろん、実行委員会はなるべく低予算で祭りを運営しようと努力しているが、一定の収入源があると一層安定した祭り運営ができる。札幌 YOSAKOI ソーラン祭りは、写真やグッズの販売などで利益を得ており、それが批判の対象にもなっている。しかし、祭りをビジネス化することで安定した収入を得ることができ、安定した運営が可能になる。今後は、補助金や協賛金の確保や祭りのビジネス化にも目を向けなければならない。

3. 人材育成

関門よさこい大会のみならず、地域のイベントを継続していくためには人材育成が大きな課題となっている。特に、少子高齢化の中で、担い手の不足により存続の危機に瀕している祭が多い。人材育成は祭りの継続には欠かせない課題である。

4. 経済効果の拡大

関門よさこい大会ではイベント開催による直接の経済効果はないにひとしく、遠方から踊りにきてくれる人が、交通費を使って、下関と門司で食事をして、お土産を買う程度のものしかない。それを見に来る観客も同様である。観客と踊り参加者の滞在期間を延長させ、経済効果を拡大できるかが課題になっている。

5. リスクの軽減

最近、地域イベントでの事故により負傷者が出たことから地域イベントにおける安全性が課題になっている。いくら良い趣旨で開催される地域イベントであっても、事故による負傷者が出ると全てが水の泡になってしまう。また、関門よさこい大会の場合の最も大きいリスクは天候である。台風や雨の場合、祭りは中止され、その損害は実行委員会で負わなければならない。徹底した安全対策の事前教育や保険加入などの備えが必要である。

6. 継続性

数多くの祭りが創出され、様々な理由で運営、維持が困難になり、縮小、消滅していく。いかにして祭りを継続させるかが課題になっている。それには魅力ある祭り作りが必要になってくる。魅力ある祭り作りには、観客が満足することも大事だが、祭りの担い手の満足がなければならない。一般的に祭りの成功を決めるものとして観客数や経済的効果があるが、祭りの担い手が満足する祭りこそが成功の可否を計るものでもある。幸い、関門よさこい大会のようなよさこい関連イベントは参加して楽しい、踊ることが楽しい人々が担い手になっている。彼らによって祭りが継続されていく可能性は大きい。

VI ま と め

本来の祭りの機能は、地域住民の共同体意識の向上が目的であった。また、開催場所もその村という地域内で開催され、地域内で村人が楽しむものであった。一方、よさこい関連祭りは、仲間意識の向上など共同体意識が強いものである。また、地域内でも開催されるが、地域外へ参加することも多い。このように、外に飛び出したことでは「地域からの乖離」である。一方、本来の「仲間で楽しむもの」への回帰の意味も含んでいる。本来の祭りの機能や性格と新たな祭りの概念を含む両面性を持っている祭りがよさこい関連祭りであろう。

よさこい関連祭りが全国的に広がったのは、YOSAKOI ソーラン祭りの成功があげられる。よさこいの全国への波及は、札幌 YOSAKOI ソーランの成功に刺激されたからであろう。YOSAKOI ソーラン祭りの話題がマスコミに取り上げられることによって、活気がなくなった地域に元気を取り戻そうと全国で開催されるようになった。九州で最も規模の大きいよさこい関連祭りが「YOSAKOI させば祭り」である。この祭りも、始まりは YOSAKOI ソーランのビデオを商店街の中で見たことがきっかけであったという。札幌 YOSAKOI ソーラン祭りの成功が「私達のまちでもできる」という自信をもたらせ、日本全国で開催されるようになった。

関門よさこい大会も、このような背景から開催されたよさこい関連イベントのひとつである。また、祭りの担い手である踊り子により祭りが創出され、運営、維持されている祭りでもある。一方で、観客拡大や予算確保、人材育成、経済効果の拡大、リスクの軽減、継続性の課題も明らかになった。こうした課題を解決し、祭りを維持することができれば、地域文化の継承や地域活性化、世代間の交流、さらには、国際交流への貢献にもつながる可能性を秘めている。

注

- 1) 内田 (2013 b) p.96。
- 2) 李良姫 (2014)。
- 3) 内田の論文では、日本各地で開催されているよさこいをういた祭りを「よさこい系イベント」として表現している。本論文では、高知よさこい祭り以外の高知のよさこいの流れを取り入れて開催されている祭りを「よさこい関連祭り」として表現する。
- 4) <http://www.yosakoi.org/jp/calendar.html>、<http://yosakoimatsuri.com>、10月3日取得。
- 5) 坪井・長谷川 (2002)。
- 6) 関門よさこい大会濱崎康一代表インタビュー。<http://blogs.yahoo.co.jp/oretaicho>、10月3日取

得。

参考文献

- 内田忠賢 (2008) 「よさこい系イベントがもつ都市祝祭の宿命」『都市問題』Vol.99、No.1、pp.73-79。
- 内田忠賢 (2013 a) 「よさこいが生み出すコミュニティ」『都市問題』104(9)、pp.22-25。
- 内田忠賢 (2013 b) 「現代祝祭のグローバルな展開-YOSAKOI-SORAN ブラジル大会-」『人文地理学会大会研究発表要旨』pp.96-97。
- 煎本孝 (2001) 「まりも祭りの創造-アイヌの帰属性と民族的共生-」『民族学研究』66(3)、pp.320-343。
- 李良姫 (2014) 「祭りの創出・観光資源化の成功要因と課題-韓国咸平郡「蝶々祭り」を中心に-」『地域政策研究』第12号、pp.69-76。
- 坪井善明、長谷川岳 (2002) 『YOSAKOI ソーラン祭り 街づくり NPO の経営学』、岩波書店。
- 中野苑香、立石武泰、杉万俊夫 (2013) 「地域が子どもを育む：博多祇園山笠と子どもたち」『集団力学』30、pp.362-407。
- 佐々木理紗、熊澤栄、二堀内美緒、四方葵 (2010) 「奥能登キリコ祭りを通した町づくりの研究 II：住民のヒアリングに基づく祭礼の衰退現象の分析」『日本建築学会北陸支部研究報告集』(53)、587-590。
- 松平誠 (1990) 『都市祝祭の社会学』、有斐閣。
- <http://www.yosakoi.org/jp/calendar.html> (よさこい WIKI プロジェクトよさこいカレンダー HP) 2014年10月3日取得。
- <http://yosakoimatsuri.com> (ザ・よさこい祭り実行委員会 HP) 2014年10月3日取得。

【謝辞】

本研究は、科学研究助成事業（「祭りの再生と観光資源化プロセスの日韓比較」、研究代表者李良姫、課題番号 24611031）の助成を受けたものであります。なお、調査にご協力いただいた、関門よさこい大会濱崎康一代表には心より感謝申し上げます。また、アンケート及びインタビューにご協力いただいた、馬関奇兵隊を始め、関門よさこい大会踊り子の皆さま、ありがとうございました。